**【鵜飼の歴史・なぜ鵜を使うのか】**

訓練した鵜を用いる漁の慣行には、少なくとも１４００年の歴史があると考えられている。また、古墳時代（西暦２５～５５２年）に溯る、鵜の姿を象ったテラコッタの小像（埴輪）がそれを示している。漁に鵜を使う慣行が中国から伝来したのか、また、日本と中国でそれぞれ独自に発展したのか、専門家の間でも意見が分かれている。いずれにしても、ウミウを使った漁（鵜飼）の証拠が、７世紀初頭の中国の図書や、８世紀の日本の図書における説話の中に見つかっている。８世紀初頭には、皇族が管理する鵜飼組織が定期的に朝廷に鮎を供給した。平安時代（７９４～１１８５年）の記録によれば、貴族の中には、鵜飼や鷹狩りの見せ物を楽しむ者がいたようである。そして、鵜飼や鷹狩りの作法について、規則が設けられていた。

現在の岐阜県地域の鵜飼の歴史については、最初の記録が、７０２年の戸籍において見つかっている。また、早くも１４７３年の記録には、折にふれて乗客を乗せた舟が出され、漁師が働く様子を見物していたことが示されている。１５６８年、日本で天下統一を果たした偉大な３名の１人に数えられる武将、織田信長（１５３４～１５８２年）は、岐阜城に陣取っていた。信長は、武将の武田信玄（１５２１～１５７３年）が岐阜に訪れた際、もてなしを表現するため、地元の鵜飼漁師が捕った鮎を贈った。信長は、鵜飼を手厚く庇護した。長良川の漁師に対し、初めて「鵜匠」の肩書を与え、伝統の保全に取り組んだ。１６１５年、初代徳川将軍、家康（１５４３～１６１６年）は、大阪の陣（１６１４～１５年）から戻る途中、長良川の鵜飼を見物した。その後、彼は鮎鮨（鮎に米を詰めて発酵させた料理）を毎年貢ぎ物として江戸城へ送るように命じた。１６１９年、この地域を支配していた尾張藩が、鵜飼の統括とこの貢ぎ物の献上を引き継いだ。

著名な俳諧の詩人である松尾芭蕉（１６４４～１６９４年）がこの地を訪問し、自身の体験を詩にしたことで、１６８８年以降、長良川の鵜飼の評判が広まっていった。１８７１年に藩制が廃止され尾張藩が権力を失うまで、漁業と観光産業が繁栄した。制度上の保護が受けられなくなったことで、長良川の鵜飼の未来は不確かなものになった。しかし、明治天皇（１８５２～１９１２年）が２度にわたり訪問（１８７８年、１８８０年）したことで、この地域は皇室に認知されることとなり、地域の鵜飼漁師は正式な保護を嘆願するよう駆り立てられた。１８９０年、長良川の３箇所が皇室向けの漁場に指定され、９つの鵜匠家（岐阜市に６家、関市に３家）の長は、「宮内省主猟局鵜匠」（後に「宮内庁式部職鵜匠」に変更される）に任命された。鵜匠はその後ずっと、世襲により、皇室に鮎を届ける職責を担うこととなる。

２０世紀には、鵜飼を観覧しようと多くの人が長良川を訪問し続けた。外国からこの地を訪れる者もいた。英国の俳優でありコメディアンでもあるチャーリー・チャップリン（１８８９～１９７７年）は、１９３６年に新婚旅行の途中に初めて岐阜を訪問した際、鵜飼の壮観に深く魅了され、１９６１年に再びこの地を訪れた。

**なぜ鵜を用いるの？**

漁師にとって、鵜はいくつかの魅力的な特徴を持っている。第一に、「鵜の目鷹の目」（「鋭い知覚と熱心さ」を意味する）という日本語の表現にも表れているように、鵜は優れた視力を持っている。鵜の目は鷹の目と違い、近い場所を見るのに最も適しているが、光の屈折を補正する特別なレンズを備えており、水中を見ることにも上手く順応している。そして、鵜の体は水中で速く動けるようにできている。水かきが付いた足を使い、素早く推進することができる。また、長い首を伸ばし、鋭いフックのようなくちばしで通りかかった獲物にとびつくこともできる。

また、鵜は海水、淡水のどちらでも魚を捕ることができ、他の多くの海鳥より深く（場合により４５メートルの深さまで）潜ることもできる。さらに、野生の鵜は危険から逃げようとするとき、より速く逃げられるよう、しばしば捕った魚を吐き出す習性がある。鵜はこの習性のために、漁に使われるようになったのかも知れない。

また、鵜は生来社会性と適応能力が高いため、漁に連れて行くには理想的な鳥と言える。鵜は人との触れ合いにも比較的速く順応する。そして、野生環境において鵜の若鳥が年長の鳥を見て魚の捕り方を学ぶのと全く同じように、飼育下の鵜も仲間の真似をすることにより、潜って、鮎を捕まえて、それを吐き出すことを学ぶ。

長良川の鵜飼漁師は、４種の日本原産の鵜の中でも、ウミウ（学名：Ｐｈａｌａｃｒｏｃｏｒａｘ　ｃａｐｉｌｌａｔｕｓ）を用いる。ウミウは体が最も大きく、スタミナが一番あると考えられている。